

## 『エーレンベルク初稿』と創作としてのグリム童話

中野隆正

グリム兄弟（長男ヤーコブ・グリムと次男ヴィルヘルム・グリム）によって出版された、『グリム童話』正しくは『子供と家庭の童話』<sup>1)</sup>は、口伝で民間に伝承するメルヒェンを、採取して、それをそのまま、まとめて出版したものと思われる。しかし本当はそうではない。その辺の事情は『エーレンベルク初稿』といわれる原稿の発見によって、研究が大変進み、それによって今日では様々な事が明らかになった。

さて、当時作家のクレメンス・ブレンターノは、アヒム・フォン・アルニムと共に、『少年の魔法の角笛』という民話集を編纂、出版して、成功した後、童話集を作ろうと考えていた。ブレンターノはグリム兄弟の友人だったので、兄弟がメルヒェンを蒐集している事を知っていた。兄弟は熱心にかくさんの話を集めていたので、ブレンターノはそれを貸してくれるように再三に渡って頼んだ。自分は昔話をメモ程度に書き留めて、自由に空想をまじえて創作するから、君たちは何も失うものはない、とブレンターノは主張した。しかしブレンターノのいいかげんな性質を知っていた兄弟は、原稿がもどってこない場合を恐れて、すべて写しをとっておいた。そして原稿を送った。それによってグリム童話は救われたのである。

1810年10月25日、総計49編がブレンターノ宛に発送された。ヤーコブは弟と共に気前よく、約束に従って、集めた民族童話のすべてをとどけること、自由に使ってほしいということ、また、あとでついで折り送り返してほしいことを、その時、付け加えている。しかし、快く提供はしたけれど、それはついに返されることはなかった。

今日ではブレンターノに送られた原稿が、グリム兄弟の肉筆のオリジナルだということが分かっている。グリム童話集は、兄弟がひかえにとっておいた写しによって編集された。その原稿は、加筆され、割つけされ、印刷のために使いつぶされてしまったので、兄弟が採取した童話の原形がどんなものであったかは、分からなくなってしまった。ところが、ブレンターノに送った原稿が、19世紀末に、彼の親戚がいたフランスのエルザス地方、トラピストのエーレンベルク修道院で発見された。それがのちに刊行されたので、グリム童話の最初の形が、即ち兄弟が口伝に聞いたままの形がはっきりつきとめられるようになった。それは、民族童話の二重の性質について、興味深い暗示を与える。即ちグリム童話も、民俗学上の学問的な資料であろうとすると共に、文学として鑑賞される作品であろうとする二つの要請の間を揺れ動いて来たことが、その原形と現行の形との比較によって、よくうかがわれるからである。そしてエーレンベルクの初稿では、ヤーコブの筆跡の話が27、ヴィルヘルムの筆跡の話が15であるから、蒐集の初めにおいては学問的にきびしい兄の方が主導的であったことがわかる。それがしだいに文学的な弟の方に傾斜していったのである。

グリム童話の原形、いわゆる初稿童話<sup>2)</sup>が初めて刊行されたのは、ようやく1924年であった。だが、そのシュルツ編『原形におけるグリム兄弟の童話、肉筆に従って編集』<sup>3)</sup>は、貴重な文献として注目されたにもかかわらず、はなはだ性急な粗雑な推論にもとづいていて、欠陥が多く、学問的研究を阻害するものであった。それで3年後にレフツが『グリム兄弟の童話、原草案、エルザスのエーレンベルク修道院のオリジナル肉筆に従って』<sup>4)</sup>を刊行した。これは周到細密な研究と鑑定にもとづいており、これによってエーレンベルクのグリム初稿童話がオリジナルとして確認され、グリム研究に一時期を画した。

しかし、今日、学術的に最も有益なものと思なされるのは、1975年にハインツ・レレケによって出版された最新版<sup>5)</sup>である。というのもレレケは、その手書き原稿が童話の材源探しに大いに役立つこと、またその手稿のおかげで、兄弟がどれほど大きな変更を加えたかがわかること、を丹念に立証しているからである。

さて、ブレンターノは、グリム兄弟より蒐集した話を送られた。しかし、彼ははずばらな性格で、いつまでたっても「童話集」を出版しなかった。一方、グリム兄弟は、その頃個人的に窮地にあったこともあり、自分たちの手で出版しようと決心し、出版にそなえて書き直すという作業に取りかかった。二人はまた、新たに蒐集した話を次々と加えていった。全体の調子を決めたのはヤーコブだが、話をどのように変えて形を整えるかについて、二人の意見はほとんど一致していた。そのことは強調しておく必要がある。というのも、ヤーコブとヴィルヘルムの間には大きな意見の食い違いがあったとする研究者もいるからだ。そうした研究者はこう主張する——1815年にヴィルヘルムが話の編集の責任の大半を引き受けた後、兄弟の間で言い争いがあり、ヴィルヘルムはヤーコブの意志に逆らって話を書き換えた、と。1815年以降、主として編集にあたったのがヴィルヘルムであることは事実だが編集作業の枠組みは1807年から1812年までの間にヤーコブがすでに作り上げており、第1巻はそのほとんどの話をヤーコブが編集している。1815年以前と後の、ヤーコブとヴィルヘルムの編集のやり方を比較してみても、大した違いはみとめられない。ただ、ヴィルヘルムのほうが、文体を練り上げ、話の内容を子どもの読者にふさわしいものにする、というか実際には、子どものために話を修正してもらいたいと思っている大人たちの思いにかなうようなものにするに、より熱心だった。その点を除けば、この仕事の初めから終わりまで、ヤーコブとヴィルヘルムの編集のやり方は同じような傾向を示している。つまり2人はともに、文体をより滑らかにしよう、話の展開をより明確にしよう、と努力しているし、形容詞や古い諺を加えたり、会話を直接話法にすることによって、生き生きと目に浮かぶような話にしたいという願いを抱いていた。また、プロットにおける行動の動機づけを強調し、心理的なモチーフを盛り込んでいる点も、素朴な調子からはずれるような要素を削除している点も、2人に共通している。ほとんどの話の手本となったのは、ロマン派の天才的画家フィリップ・オットー・ルンゲの作品である。方言で書かれた『漁夫とその妻』と『ねずの木』は、口調、構造、内容ともに、グリム兄弟が創作したいと思っていたような理想的な物語を典型的に示していた。

そして実際、2人は創作したのである。グリム兄弟はたんに話を蒐集しただけではなかった。事実、1812年と1815年に出版した156話からなる2巻本において2人がなし遂げたことは、何よりも、文学のおとぎ話の理想像を創作したことである。すなわち、口承伝統にできるだけ接近しつつ、台頭しつつあったブルジョワの読者に受けるように、文体にも形式にも実質的テーマにも変化を加えたのである。1819年には170話を1巻にまとめた童話集第2版が出版された。このときはヴィルヘルムが改定を全面的に受け持ったが、それまでに兄弟はすでに1つの形式と文体を確立していた。その形式と文体とによって、ドイツ文化とヨーロッパ文明の起源をめぐる深遠な真実と思われるものを集め、保存し、ドイツの民衆に提供したい—それが兄弟の願いだった。まさしく2人の考えでは、ドイツ人が培ってきた慣習の中には「人類の幼年期」が埋め込まれており、童話とは、そうした豊かで自然な文化を想起させるものであるべきであった。

1819年以降、童話集は更に5回にわたって改定を重ね、新たに69話が付け加えられ、28話が削除された。1857年の第7版では全部で211話になっている。1819年以降に付け加えられた話のほとんどは文献資料から採集されたもので、残りは提供者から兄弟に送られたものか、別の童話集から再録されたものであった。実際、1819年以降の主な仕事は改良であった。ヴィルヘルムは元の話をも、ヤーコブと2人で入手した別の類話と比較して、しばしば手を加えた。ヴィルヘルムは、自分たちがそれぞれの話の「本質的」メッセージと見なしたものはそのまま残そうと努めているが、概して、ブルジョワの読者に、より相応しいような上品な話にしようという傾向が見える。したがって、手書き原稿から1857年の決定版にいたるまでの間に、兄弟が加えた変更を知っておくことは重要である。たとえば、以下の例を比較されたい。

『星の銀貨』<sup>6)</sup>

初稿「貧しい少女」

| 初版「貧しい少女」(83番)

| 決定版「星の銀貨」(153番)

夕食のパンもなく、両親もなく、ずきんもなく、欠点もないが、星がきらめくごとに、下できれいな銀貨を見つけた云々、という貧しい少女の童話。

昔ひとりの貧しい小さい女の子がおりました。父親も母親も死んでしまいました。もう、住むことのできる家も、眠ることのできる寝床もありませんでした。からだにつけている着物と、情け深い人がめぐんでくれた1きれのパンを手を持っているほかには、世の中にもう何も持っていないませんでした。けれども、気立てのよい、信心ぶかい子でした。こうして、女の子は外に出ていきました。すると、途中で貧しい男の人に会いました。その人は、何か食べるものをください、としきりにたのみましたので、女の子はパンのきれをその人にやりました。それからさきへ行くと、ひとりの子どもがやって来て、言いました。「頭が寒くてしょうがないの。頭に巻きつけるものを何かちょうだい」そこで女の子は帽子をとって、その子にやりました。なおすこし行くと、またひとりの子がやって来ました。子どもはジャケットを着ていないので、女の子は自分のをその子にやりました。なおさきへ行くと、ひとりの子どもが上着をください、と言いました。女の子はそれもぬいでやりました。とうとう森の中へ入りました。もう暗くなっていました。そこへ、またひとりの子どもがやって来て、はだ着をください、と言いました。やさしい女の子は暗い夜だ、はだ着をやってもいいわ、と考え、はだ着をやりました。すると、突然、空から星が落ちてきました。それはきらきら光る銀貨ばかりでした。そしてはだ着をやってしまったのに、女の子

昔ひとりの、小さい女の子がおりました。父親も母親も死んでしまいました。たいそう貧しかったので、住むへやも、眠る寝床もありませんでした。しまいには、からだにつけている着物と、手に持っている1きれのパンのほか、何もなくなってしまいました。そのパンも情け深い人がめぐんでくれたものでした。けれども、信心ぶかい気立てのよい子でした。こうして世間に頼りにする人がひとりもいなくなってしまったので、この子は神様をたよって、野原へ出ていきました。すると、ひとりの貧しい男の人に会いました。その人は、こう言いました。「ああ、何か食べるものをください。わたしはひもじくてたまらないんです。」女の子は、パンのきれを残らずその人にやって、「神さまのお恵みがありますように」と言い、さきへ歩いて行きました。すると、ひとりの子どもがやってきて泣き泣き言いました。「頭が寒くてしょうがないの。何か、かぶるものをちょうだい」そこで、女の子は、自分の帽子をとって、その子にやりました。なおしばらく行くと、またひとりの子どもがやって来ました。子どもはジャケットを着ていないので、こごえていました。それで、女の子は自分のをその子にやりました。またさきへ行くと、ひとりの子が、上着をください、と言いました。女の子はそれもぬいでやりました。とうとう、森の中に入りました。もう暗くなっていました。そこへ、またひとりの子どもがやって来て、はだ着をください、と言いま

ははだ着をつけていました。しかも、ごくごく上等なリンネルのでした。こうして女の子は銀貨を集めて、ポケットに入れ、一生お金持ちになりました。

た。やさしい女の子は、「暗い夜だ。だれにも見られやしない。はだ着をやってもいいわ」と、考えました。そして、はだ着をぬいでそれもやりました。女の子がそうやって、もうなんにも持たないで立っていると、突然、空から星が落ちてきました。それはきらきら光る銀貨ばかりでした。そして、はだ着をやってしまったのに、女の子は新しいはだ着をつけていました。しかもそれがごくごく上等なリンネルでできていました。こうして、女の子は銀貨を集めて、ポケットに入れ、一生お金持ちで暮らしました。

以上の例から明らかなように、グリム兄弟は編集に際して話を大きく変えた。中産階級の道徳律に反するような、エロティックな要素や性的な箇所を取り除き、キリスト教的な表現や要素をたくさん付け加え、主人公を描く際には、彼らの時代に支配的だった父権主義的な規範にしたがって男女の役割分担を強調し、古風で趣のある言い回しをしたり、気のきいた描写をしたりして、多くの話に「家庭的な」雰囲気、すなわちピーターマイヤー風の味わいを添えたのである。更に、童話集をはじめは子どもの読者を対象にしていたわけではなかった——最初の2巻本には学術的な註釈がついていて、これは後の版では別冊になった——けれども、ヴィルヘルムは、1819年以降のすべての版について、より子どもに相応しくなるように、というより彼の目から見て子どもに聞かせるに相応しいと思えるように、書き直した。実際、『トルーデおばさん』や『わがままな子ども』など、いくつかの話の狙いは子どもに対する厳しい教訓である。このような教訓主義は、グリム兄弟が考えていたような童話集のあるべき姿、すなわち教育読本と、矛盾するものではなかった。道徳を重んずる中産階級の読者を引きつけようとする傾向は、いわゆる『小さい版』<sup>7)</sup>に特に明確にあらわれている。これは、『大きい版』<sup>8)</sup>から50話選んで一冊にしたもので、『大きい版』をより一般に広め、売れ行きをあげるために、1825年に初めて出版された。この『小さい版』は魔法昔話のほとんどを取録していて、1825年から1858年までの間に十版を重ねた。そこに収録された、『灰かぶり』『白雪姫』『いばら姫』『赤ずきん』『かえるの王様』といった話はいずれも、プロテスタント倫理や父権主義的な男女の役割分担と合致するような道徳律を強調しているから、この『小さい版』の成功は間違いなかった。

魔法昔話は、おとぎ話としては19世紀のヨーロッパとアメリカでもっとも人気があったものだが、忘れてならないのは、グリム童話には魔法昔話だけでなく、珍しい寓話、伝説、兵士や職人の話、逸話、笑話、宗教説話なども入っているということである。グリム童話の多様性はしばしば見落とされる。なぜなら、親、教師、出版社、批評家のいずれもが、ほんのひと握りの話にしか注目しようとしなからである。批評家は、話の効用について、また、話を子どもにどう伝えるべきか、あるいは伝えるべきではないかについて論じるが、その話を選んだ理由についてまで述べたりしないものだ。

グリムの『子どもと家庭の童話』はたいへん人気があったが、ドイツですぐにベストセラーになったわけではない。実際、一時はルートヴィヒ・ベヒシュタインの『ドイツ童話集』<sup>9)</sup>(1845年)の方がはるかに人気が高かった。見るからに「親しみやすい」ところがブルジョワに受けたのだ。しかし、グリ

ム童話もそれなりに売れ、どの版も売り切れた。1870年代になると、グリム童話はプロイセンその他のドイツ侯国で学校教育に取り入れられ、いくつかの話は他の西洋諸国の初等読本や子ども向けの名作集にも入れられた。20世紀に入る頃には、『子どもと家庭の童話』はドイツでは聖書に次ぐベストセラーとなり、今日なおその地位を保っている。1985、86年のグリム生誕200年を契機に、驚くほど大量のグリム童話がドイツ語圏にあふれ、50種類以上のグリム童話の絵本が出版された。

#### 註

- 1) “Kinder-und Hausmärchen”
- 2) Urmärchen
- 3) Fr. Schultz : Märchen der Brüder Grimm in der Urform 1924
- 4) Joseph Lefftz : Märchen der Brüder Grimm, Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Ölenberg im Elsass 1927
- 5) Heinz Rölleke : Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812. (Cologne-Genève 1975 : Bibliotheca Bodmeriana. Texte 1)
- 6) 高橋健二「グリム兄弟」(新潮社) 1968 P142-144
- 7) Kleine Ausgabe
- 8) Grosse Ausgabe
- 9) Ludwig Bechstein : Deutsches Märchenbuch 1845

(本学教授)